イスラエル考古学研究会

ニュースレター

No. 4

2007 年 7 月

テル・レヘシュ 第 2 次調査・速報

山内　紀嗣

（テル・レヘシュ発掘調査団副団長）

昨年春より始まったテル・レヘシュ遺跡の発掘調査はレバノン戦争のため延期されていたが、2007 年 3 月 10 日～ 3 月 28 日にわたり、第 2 次調査を行なった。今年の春は日本同様、イスラエルでも天候不順で寒い日があり、みぞれや雨のために遺跡に到着することができない日もあったが、無事に終えることができた。発掘の途中には香取克章・駐イスラエル大使が来訪し、発掘の様子を見て帰られた。また、テル・アヴィヴ大学名誉教授モシェ・コハヴィ氏、ヘブライ大学教授アミハイ・マザール氏の来訪があり、いろいろとご教示を得た。

第 2 次調査ではテル北端にあると想定されている城門と遺跡の東側中央部で地表に露出していた城壁の南東隅の確認など、新たな目的をもって発掘にあたった。以下、大きく 4 地区に分けて説明する。

「城門」地区

（D3e5・E3b4・E3d1・E3d3・E3e3・E3f3 区）

この地区は地形図から城門があると推定されるので、「城門」地区と称している。調査の結果、鉄器時代のケースメート式城壁（二重式城壁）が東西方向に認められた。また、その北東隅近くには塔とみられる構造がとり付いていたこともわかった。こうした遺構は出土遺物から鉄器時代第 I 期から第 II 期にかけて継続的に使用されていたことがわかる。城壁の外側には壁に接して礫の広がりがあり、城壁を守るための斜堤とも考えられるが、礫はきちんと積まれたようではなく、ただの落石の可能性もある。この点については次期調査での確認を要する。また、城壁近くからは中期青銅器時代の土器がかなりの量出土しており、下層にその時期の城壁が埋まっているかもしれない。

今期は城門を見つけることはできなかったが、今回の調査地区のやや西、あるいは南側で発見される可能性が高いとみられる。

アクロポリス地区（D4e9 区）

遺跡の最高地点であるアクロポリスのうち、南端に近い地区を発掘した。昨年度の調査区画の北隣である。区画の北半分で東西方向の基礎石列を検出した。また、それにとり付く南北方向の石列もある。こうした石列はその上半をローマ時代に削平されている。ローマ時代の遺物は多いが、昨年度に引き続

「城門」地区を西から望む

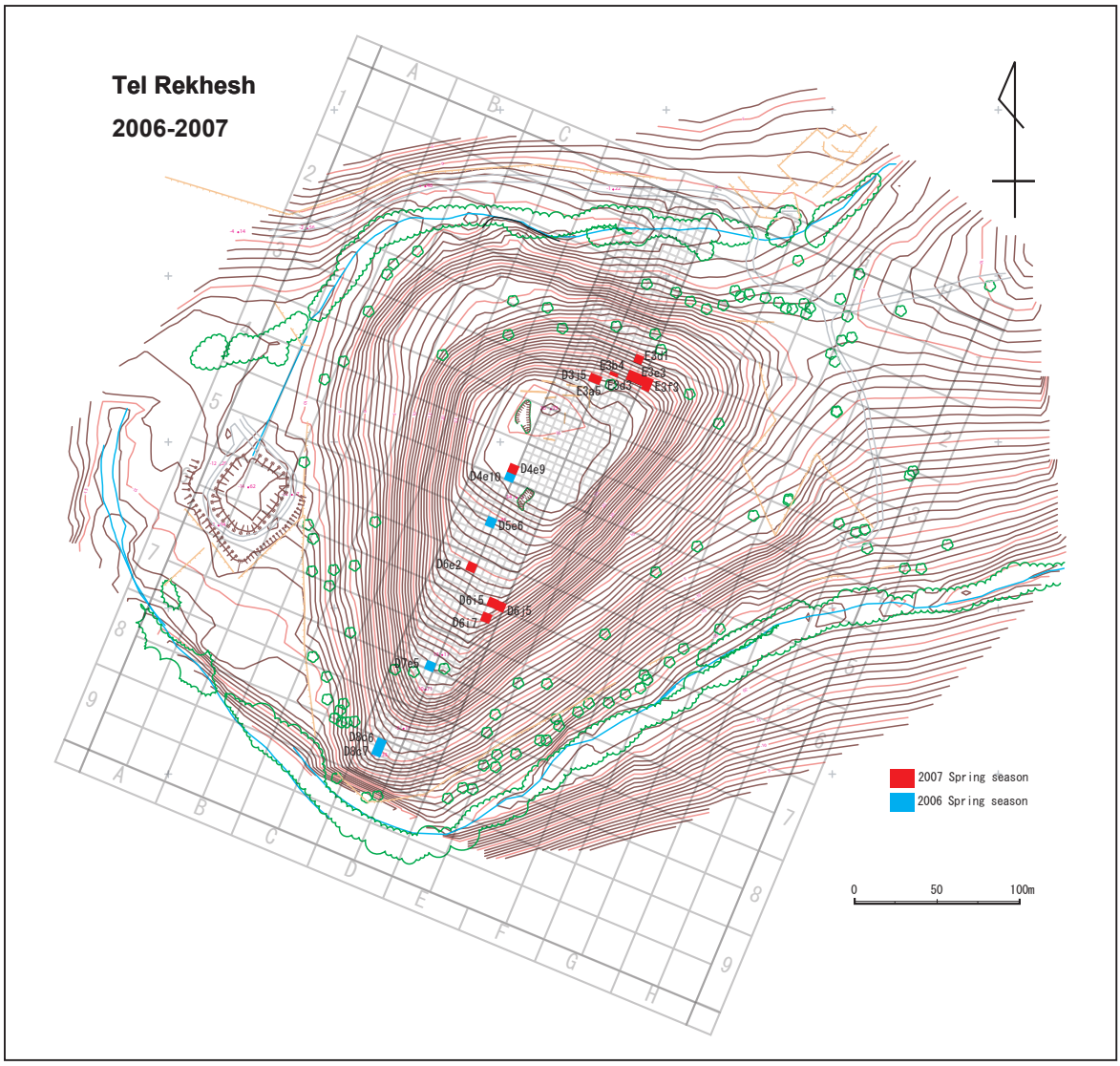
きユダヤ教の儀式に用いる石製の容器も出土した。また、琥碧製の首飾り、水晶製ビーズ玉なども出土した。

南のテラス地区（D6e2 区）

「南のテラス地区」はアクロポリスの約 50m 南にあたるやや平坦な場所である。顕著な遺構はなかったが、約 1 m 掘り下げた段階で中央やや東側で南北方向の石列が認められた。出土遺物は鉄器時代第 I 期のものが多いが、後期青銅器時代にさかのぼる土器もあり、遺跡の成り立ちを調べるため、もう少し深く掘り下げてみる必要がある。

東側城壁地区（D6i5・D6i7・D6j5 区）

遺跡の東側へ傾斜する地点で城壁を明らかにするために 3 つの区画を発掘した。平坦面の肩部で南北方向の城壁を確認した。幅約 2m。また、これにとり付く 2 本の石列があることもわかった。この 2 本の石列は約 10m 離れている。南のものには幅約 1 m の入り口部分がある。これらの城壁の年代はまだよくわかっていないが、北側の石列はその上面に鉄器時代第 II 期の土器が据え置かれていた。ま



テル・レヘシュ周辺の地形および調査区

た、南の石列の入り口付近で鉄器時代第Ⅰ期の焦土層が確認でき、その下層で樋のような形の玄武岩製品が出土した。そのそばにはやはり玄武岩製の油絞りの容器が出土しており、あるいは祭祀的な目的があったのかもしれない。第３次調査ではこうした石製品の下部構造がどのようになっているのかを調査することにしている。

以上、第３次調査へ向けて、課題は多い。

（天理大学附属天理参考館学芸員）

樋状の玄武岩製品（東側城壁地区）

テル・レヘシュ発掘 公式 HP　http://rekhesh.com/

テル・レヘシュとテル・カルネイ・ヒッティン*

ツヴィ・ガル（長谷川 修一・訳）

はじめに

南をハロド平野、北をアルベル川、西をナザレ山地及びタボル山、東をヨルダン渓谷で囲まれた下ガリラヤ東部は遺跡丘が非常に少ないことで知られている。その中で突出しているのがテル・レヘシュとテル・カルネイ・ヒッティンの２つである。テル・レヘシュが長期間に亘る居住の痕跡がある真性遺跡丘であるのに対し、テル・カルネイ・ヒッティンは一般的な意味合いでの遺跡丘ではなく、むしろ火山性丘陵であり、後期青銅器時代と鉄器時代に主として居住されていた〔原文では鉄器時代を「イスラエル時代」、青銅器時代を「カナン時代」としていることがあるが、統一した――訳注〕。また、テル・レヘシュが多くの水源並びに農地の近くにあるのに対し、テル・カルネイ・ヒッティンは近隣に水源がなく、その周囲一帯は玄武岩の岩山である。また、テル・レヘシュがタボル川の中に（一見非論理的だが）位置するのに対し、テル・カルネイ・ヒッティンは孤立し、防御にまさに適している。そして最後に、テル・レヘシュが主要幹線道路（海の道の支線）から比較的離れているのに対し、テル・カルネイ・ヒッティンはその地域の主要道を直接支配している。これらすべての相違点にもかかわらず、この２つの遺跡はともにこの地域の中心的な居住地であったことが明らかになっている。下ガリラヤ東部で体系的な踏査が行われた結果[1]、周辺全域のデータと、テル・レヘシュにおいてなされた踏査、及びテル・

＊ この論文は『エレツ・イスラエル』第 15 巻 (1981 年) に掲載されたものである。著者であるツヴィ・ガル氏に日本語への翻訳許可をお願いしたところ、快諾していただいた。記して謝意を表する――訳者

(1) 踏査は以前ツォリによって行われた。N. Zori, *The Land of Issachar: Archaeological Survey*, Jerusalem 1977 (Hebrew) 参照。現在の調査は筆者の指揮のもと、考古学踏査協会とギルボア野外スクールが行う踏査の一環として行っている。

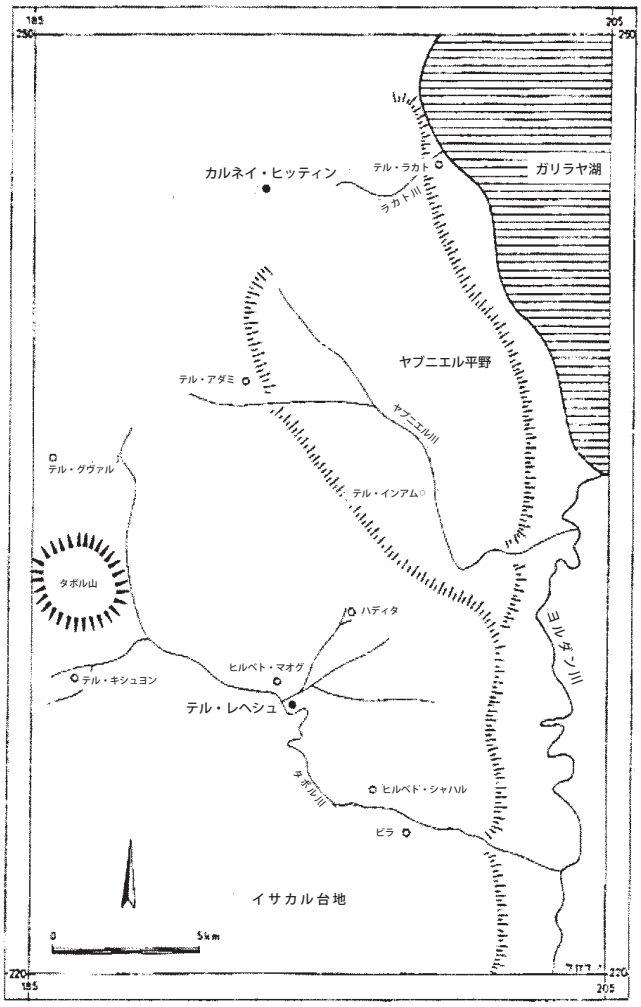


図１　下ガリラヤ地方東部

カルネイ・ヒッティンで行われた試掘によって得られた遺物によってこの２つの遺跡の特徴を要約することが今や可能となった[2]。

これら２つの遺跡の同定はヨハナン・アハロニによる。アナハラトは長い間テル・アジュール（北）に同定されていたが、テル・アジュールが遺跡丘ではありえないことがわかり、アハロニはアナハラトをテル・レヘシュに同定した[3]。それよりもずっと以前に、アハロニはカナンの町でありイスラエルの土地であるシェメシュ・アダムをテル・カルネイ・ヒッティンに同定した[4]。踏査と発掘によって得た遺物はこれらの同定をよく裏付けている。

テル・レヘシュ

テル・レヘシュの位置は例外的であるばかりではなく、ある意味驚くべき位置にあると言える。遺跡丘は西から東に流れるタボル川の流れの中にあり、ちょうどそこに北東から南西に流れるレヘシュ川が注ぎ込んでいる（図１参照）。この２つの川の合流点は「フォーク状の地形」を形成しており、そこに遺跡丘が位置している。この２つの川は今日に至るまで一年中水を湛えており、テル・レヘシュの三方を水流で囲み、東側にはタボル川の北の土手と接する鞍部が形成されている。

この場所は大きな短所を抱えているように思われる。タボル川の両岸はテル・レヘシュの位置するこのあたりから東に向かって高く聳えているのに対し、川の流れ自体は遺跡丘の東側に位置する玄武岩の峡谷に向かって徐々に狭くなっている。このため、タボル川の南岸に立つと（ただしここだけではない）、遺跡丘より 75 メートル高い位置から、真下にあるテル・レヘシュを見下ろすことができる。こうした短所はあるものの、タボル川西側の農耕可能な土地に近いことは利点である。遺跡丘から西に 2.5 キロメートルのところで、川は比較的広い谷となっており、そこには幾つかの水源がある。その谷には肥沃かつ灌漑地の拡大が可能な数千平方メートルの農地が広がっている〔原文では面積の単位として 0.1 ヘクタールにあたる「デュナム」が用いられているが、メートル法に統一した――訳注〕。それゆえ、この遺跡丘は同地域の中心的存在に発展するのに欠かせない決定的な要素を有している。イサカル丘陵とヤブニエル丘陵の土地が玄武岩質で堆積物が比較的乏しいの

(2) この発掘は筆者が考古局とギルボア野外スクールに委任されて 1976 年８月に行った。
(3) Y. Aharoni, Anaharath, *JNES* XXVI (1967), 212-215 参照。
(4) Y. Aharoni, *The Settlement of the Israelite Tribes in the Upper Galilee*, Jerusalem 1957, 81-83. さらに遡れば、*IEJ* III (1953), 158, No. 22.

に対し、8キロメートル離れ、かつ灌漑農耕に不可欠な水源に欠けるものの、ケスロト平野（Chesulloth タボル山麓）はその縁部の地味が肥沃である。近隣のこれら2つの地域と比べると、テル・レヘシュの西側に位置するタボル川の一部は、肥沃な土地と安定した水源、また灌漑農耕が可能な地形を有しているという点で特筆に価する。

これらの農業における利点は、前述した条件下とその地理的環境において、遺跡丘の発展に重要な役割を果たしたようである。テル・レヘシュがメギドからタボル山麓の北を走る「海の道」のルートから外れているという事実を加味すれば、この要素はさらに重要性を増す。

いかなる主要道もタボル川流域を通っていなかったことは疑問の余地がない。一見良好な幅の広いルートに見えるが、東西方向のルートとしては、この川はあまり快適なものではない。この川には、支障なく通行するのに十分な幅を持った道を作れるほど川床部分がない。特に川の西側部分は狭い玄武岩質の峡谷によって東側部分と分断されており、通行が不可能である。しかし、主要道から遠いからといってテル・レヘシュの住民がそれを支配下に置くのは難しかったと考えるのは短絡的である。実際、遺跡丘の上には中核となりうるような集落が見られ、テル・キシュヨンやヒルベト・アルパドなどの「娘たち」のひとつを通して主要道を支配下に置いていたと考えられる〔「娘たち」とは旧約聖書中の表現で、中心的な都市の周辺にある衛星的な小都市・集落を指す——訳注〕。

テル・レヘシュの面積はおよそ4ヘクタールである。これはこの遺跡丘の重要性を示唆する決定的な数値である。遺跡丘は左右対称でない一種の楕円形をしており、楕円の狭い頂点が南、広いほうが北に向いている（図2参照）。堆積は遺跡丘の北部のほうが高く、海抜34メートルで、タボル川の水面から約54メートルの高さである。遺跡丘東部と北部の回廊部分は急勾配である一方、西部は幅30メートルにも達する低い段状部で、この遺跡丘の初期の集落と思われる遺構がそこで確認されている。

遺跡丘は南に向かって大きく3つの段を形成しながら下っており、段から段への通り道は等高線上に顕著に現れている。これらの段は異なる時代に作られた防御施設を反映しているようである。中央段上の大規模な壁の遺構は、おそらくケースメート式城

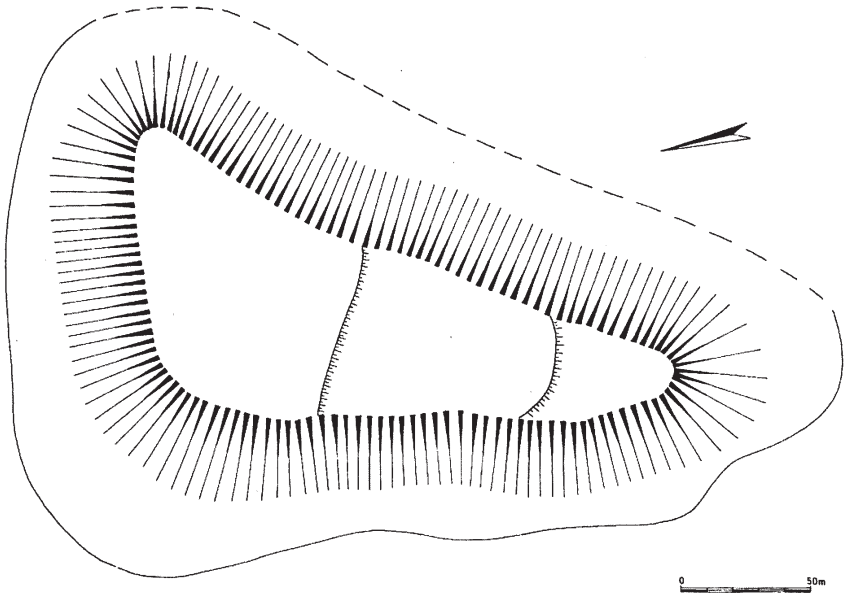


図2　テル・レヘシュの構造

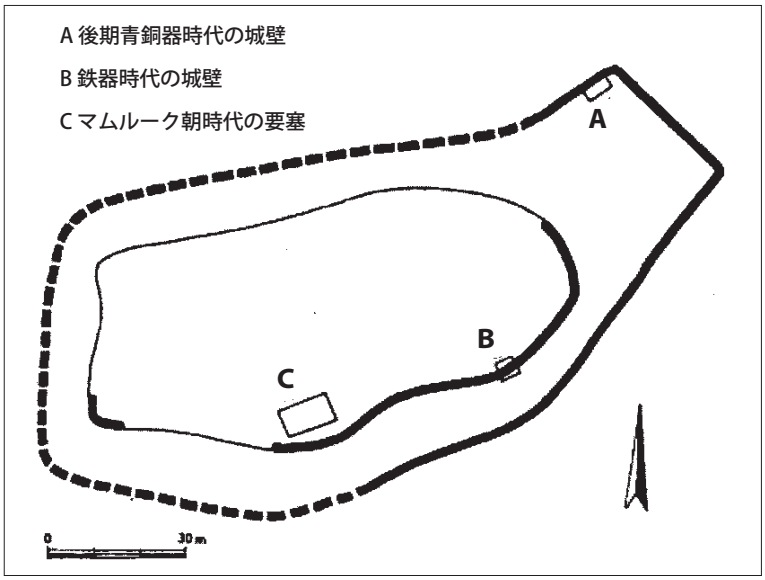


図３　カルネイ・ヒッティン南頂部の城壁

壁であったものと思われる。東側の回廊部で確認された複数の防御施設の基礎部は、積み重なるようにして建てられているようである。北の回廊部にも同じ状況が想定できるが、表土上にはいかなる遺構も確認することができない。遺跡丘で検出された土器を見ると（後述）、最下段に前期青銅器時代 II 期の集落址があると思われ、中央の段に前二〇〇〇年紀の集落址、さらに遺跡丘最上部の面には中期青銅器時代の防御施設群が形成されていたようである（図2）。

ケースメート式城壁の遺構は鉄器時代のもので、その上にペルシア時代の遺構があり、さらにその上にビザンツ時代の建物とベドウィンの墓が遺跡丘頭頂部で確認されている。このことから、遺跡丘とその周辺部とを地形的に結んでいるのは遺跡丘の東側のみであり、その部分に集落への城門を探し求めるのが論理的であろう。当初は城門に向かって直接近づくことが可能であったと考えられるが、前二〇〇〇年紀後半に遺跡丘が高くなってからは遺跡丘の麓をジグザクに上っていたように見える。実際、遺跡丘東部の表面にはジグザク状のラインが確認され、それが北東隅に推定される城門へと続いている。

テル・レヘシュの歴史の概略は採取された遺物に依るところが多く、その大部分はキブツ・エン・ドルに収集されている。長年収集された遺物の中には、特記すべきものが幾つかある。1972 年には遺跡丘上でヒエログリフ文字の記されたエジプトの碑文断片が見つかった [5]。その数年前には土製の神殿模型が見つかっている。この模型は完形で見つかり、鉄器時代 I 期のものである。突起部のあるペルシア時代の S 字状屈曲鉢も遺跡丘で見つかっている [6]。

テル・カルネイ・ヒッティン

テル・レヘシュとは対照的に、テル・カルネイ・ヒッティンは玄武岩質の岩で覆われた平野部に位置し、水源がないために農耕の可能性は極めて乏しい。唯一の水源は遺跡丘の北西 1 キロメートルのところにあるネビ・シュエイブ（Nebi Shu‘eib）である。しかし、この唯一の水源に到達するには 215 メートルもの標高差を下らなくてはならず、帰路はやはり険しい坂を上らなければならない。居住という観点からすると、テル・カルネイ・ヒッティンの立地条件は悪いと言える。それにもかかわらず、この場所には集落が発展し、後に堅固な要塞へと変貌した。その理由は唯一の利点である主要道を支配下に置けるということである。

遺跡丘はイズレル平野から北に向かい、ガリラヤ湖へ下るまでの「海の道」の一部を支配下に置いている。東部下ガリラヤ高地からガリラヤ湖へ下る道はラカト川に沿って通っている。これはガリラヤ湖沿岸で上り下りが比較的楽な唯一の経路である。ラ

(5) *Hadashot Arkheologiyot* 44, 42.
(6) *Hadashot Arkheologiyot* 30, 12.

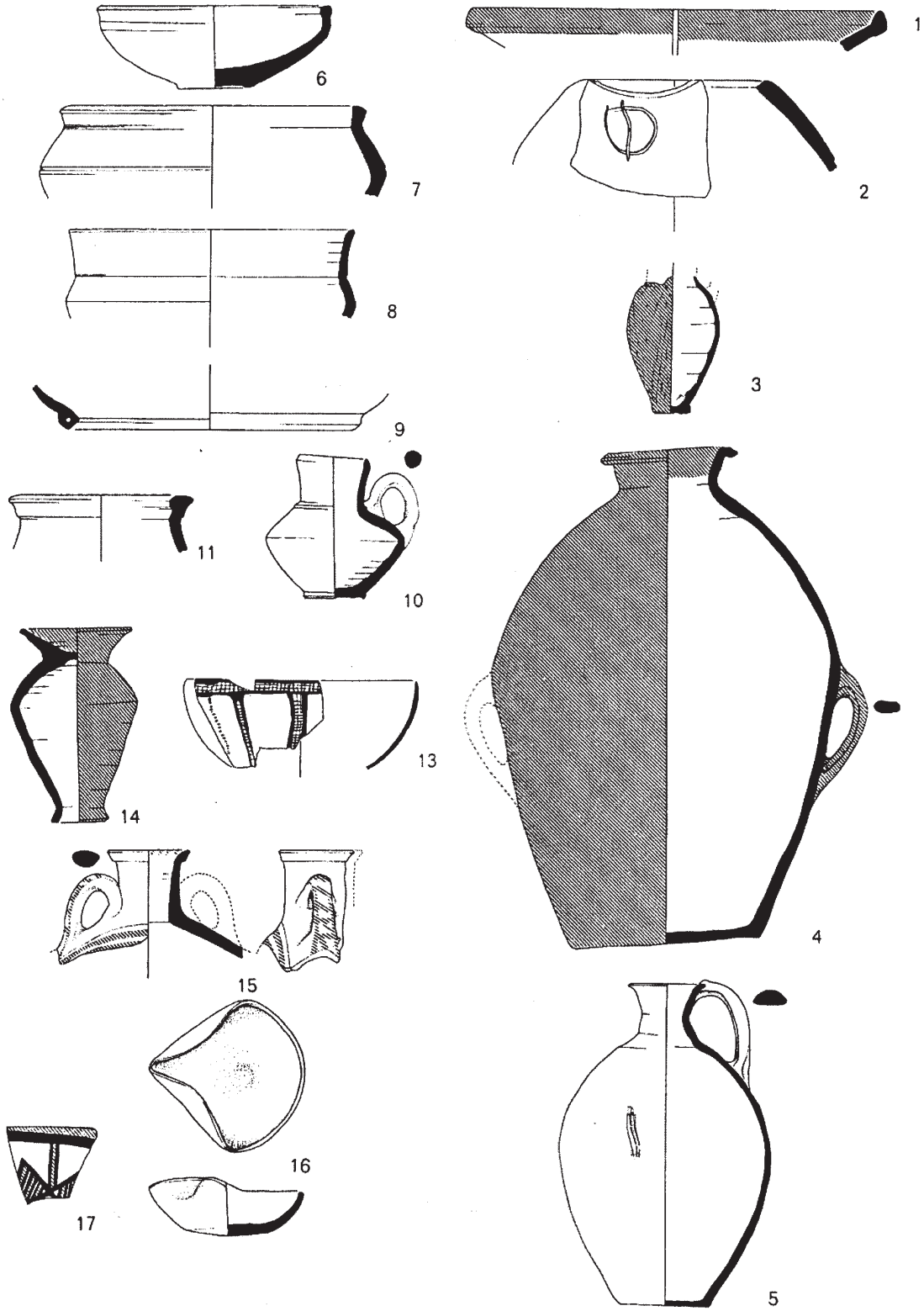


図4　テル・レヘシュ出土の土器

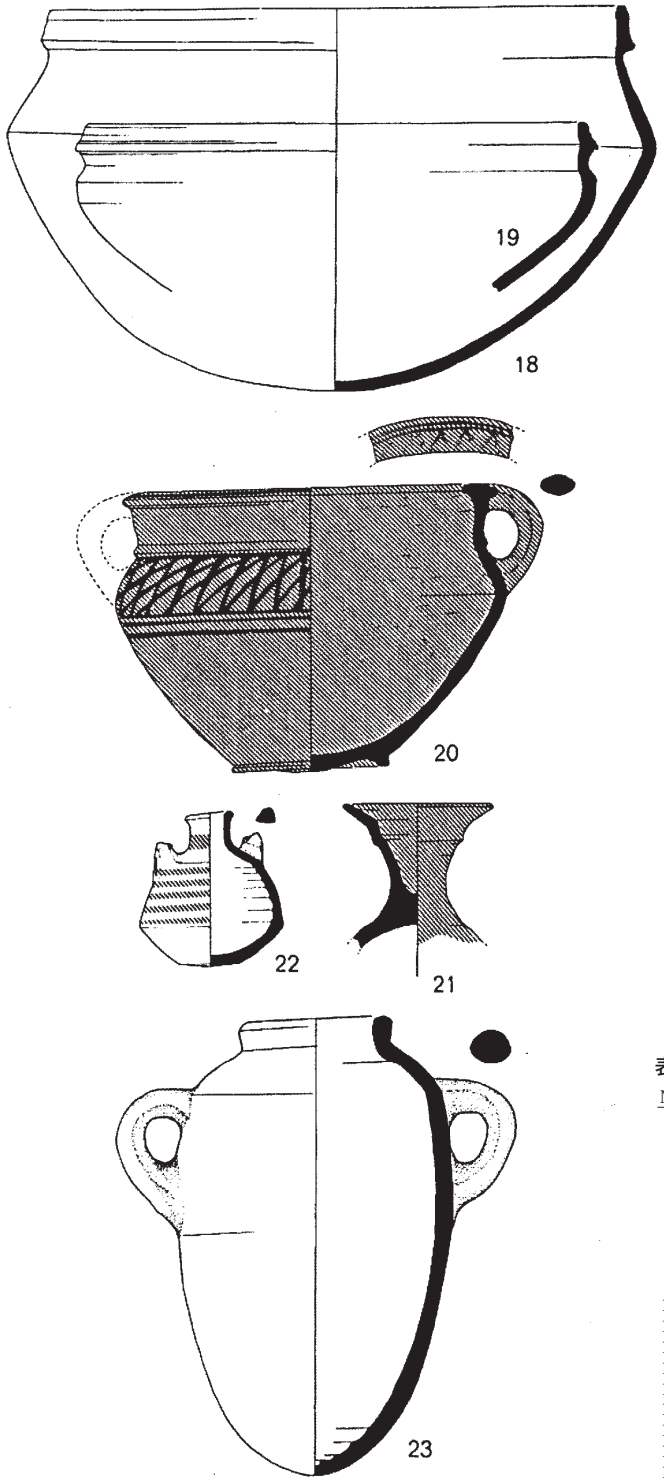


図４　テル・レヘシュ出土の土器（つづき）

カト川の坂の頂上部にカルネイ・ヒッティンが位置し、下流にテル・ラカト（クネイトラ）がある。これら２つの遺跡丘が傍らを通る道によって発展したことは疑いない。テル・カルネイ・ヒッティンはイスラエルを横断する主要道の数少ない要衝のひとつを支配していたのである。この事実はなぜ環境的に厳しいこの場所に集落が発展したのか、その理由を説明してくれる。

カルネイ・ヒッティンから見下ろすことのできるもうひとつの道は、ヨルダン渓谷のテル・アビディーヤ（Tell ‘Abidiyah）から上り、ヤブニエル近郊のテル・インアム（Tel Yin‘am）を通ってヤブニエル平野の上に位置するテル・アダミ（Tel Adami）に至る道である。この道は「ダルブ・エル・ハワルネ」という呼称で知られており、サリサロによって踏査され、青銅器時代から存在していたことが指摘されている[(7)]。

前述の通り、テル・カルネイ・ヒッティンは普通の遺跡丘ではなく、噴火口を思わせる形状の火山性丘陵である。この丘には２つの頂とそれに挟まれたクレーター部分がある。集落址は南の頂の上にあり、北の頂より高くなっている。しかし、巨石からなる城壁の跡はクレーターを囲い、北へ延びて北の頂と接合しているよ

表１　テル・レヘシュ出土の土器（図４）

No	土器	時代	記　述
1	大皿	EB II	灰褐色土、赤塗り
2	広口壺	EB I	灰褐色土
3	把手付壺	EB II	灰褐色土、赤塗り、網模様
4	壷	EB II	灰褐色土、赤塗り
5	把手付壺	EB II	灰褐色土
6	鉢	MB IIB	明灰色土、細かい含有物
7	鉢	MB IIB	明灰色土、細かい含有物
8	鉢	MB IIB	明灰色土、細かい含有物
9	調理鍋	MB IIA-B	明灰色土、細かい含有物
10	小型把手付壺	MB IIB	明灰色土、細かい含有物
11	壷	MB IIB	明灰色土、細かい含有物
12	調理鍋	LB II	黒色土、白い含有物
13	ミルク・ボウル	LB I	白色土、黒い縞
14	円錐形壺	LB I-II	灰色土、赤褐色塗り
15	扁壺	LB II	灰色土、赤い縞
16	ランプ	LB I	灰褐色土
17	二彩土器片	LB I	灰色土、赤と黒の縞
18	調理鍋	Iron I	茶褐色土、白い含有物
19	調理鍋	Iron I	茶褐色土、白い含有物
20	クラテール	Iron I	赤みがかった土、赤塗り、明確な縞
21	高坏	Iron I	灰色土、赤塗り
22	ピクシス	Iron I	灰色土、黒い縞
23	壷	Iron I	明灰色土

うに見える（図３参照）。この城壁は南頂上にある集落に対して、別種の区域、すなわち「下の町」に相当するものを形成している。この「区域」への入り口は西にあり、今日ではそこをクレーターへ通じる未舗装路が走っている。この城壁の年代、その性格と集落との関係については明らかではない。クレーターの下部はしばしば周辺に住むベドウィンによって耕され、そこで多くの土器片を集めることができる。しかし、クレーターの堆積土は少ないことが調査によってわかっており、ここに古い時代の堆積があるかどうかは明らかでない。もしかするとこの堆積土の大部分は南頂部から流れ落ちてきたものかもしれない。

南頂上には幾つかの城壁の跡があり、そのどれもが玄武岩質の巨大な切り石で建てられている。この頂上部には２つの主要な部分がある。ひとつは頂上の高い部分で、もうひとつは頂上より東の低いテラス状の部分である。城壁跡が地形に沿ってどのように走っているかを調査した結果、この部分には２つの防御施設があったことが明らかになった。ひとつは２つの部分を含む南頂部全体を囲み（下の城壁）、もうひとつは高い部分だけを囲んでいる（上の城壁）。これを踏まえ、これら城壁の年代を探るべく、小規模な試掘が行われた[(8)]。城壁の幅を確認し、要塞内部において床面を成す部分が発見できるかどうか調べるため、それぞれの城壁で、露出している部分に接して試掘がなされた。下の城壁の調査はより容易だった。東部のテラス北東隅には長さ数メートルに及ぶ部分があり、そこでは城壁の幅全体が表土面に現れていた。試掘坑は城壁内部と城壁に接した部分に設けられた。

下の城壁の試掘によって、城壁の幅が 2.60 メートルであることが確認された。この城壁は大きな玄武岩塊から成り、現存部は 1.60 メートルの高さであった。その近くに城壁に垂直を成す石の壁の一部が出土し、また、美しい小石の床敷きが出土した。

これらの遺構はすべて、0.40 メートルの厚さの焼土層に覆われていた。焼土層には焼けたレンガ質の赤色を呈した痕跡や、再度焼けてピンク色に硬化した土器片が残されていた。この焼土層の上には崩落した石の層があり、その下部は間違いなく破壊時のもので、上部はおそらくそれより後のものである。

床上と焼土層から見つかった土器はすべて前 14 世紀から前 13 世紀までの後期青銅器時代のものであった。また、崩落石層の高い部分の中からは、層位学的な関係は不明であるが、鉄器時代初期の土器片、特に調理鍋と襟付口縁貯蔵甕の口縁部が見つかったことは特筆に価する。石敷きの床はその西隅が鉄器時代、おそらく前９世紀から８世紀のピットで壊されていた（図５）。

上の城壁については、城壁の幅全体が露出した部分は地表では確認できず、傾斜部に向いた部分の露出だけが確認できた。城壁の跡を明らかにするため、南の傾斜部の地点を選び、幅 2.5 メートルの石の基礎部分を検出することができたが、最大幅ではない。城壁の内側の端を見つけることができなかったのである。基礎石の間から出土した土器は前９世紀から前８世紀のものであった。

したがって、ここには２つの町の跡が確認される。ひとつは青銅器時代、もうひとつは鉄器時代の町である。青銅器時代の町は南頂部全体に広がり、その面積は 0.9 ヘクタールに及ぶ。しかし、この時代、城壁で囲まれた区域全体に人が住んでいたわけではなかったようだ。東のテラスでは岩盤が一部で見つかり、人が住んでいたかどうかはまったくわからない。それゆえ、青銅器時代の集落は町というよりも大きな要塞であったと推定される。鉄器時代の集落はテラス部を放棄して頂上部のみに縮小した。頂上部の堆積は厚く、推定でおよそ２メートルにも達する。面積は最大でも 0.5 ヘクタールである。

最頂上部の青銅器時代と鉄器時代の堆積の上にはマムルーク朝時代の砦が発見された。その近くには

（7）A. Saarisalo, *The Boundary between Issachar and Naphtali*, Helsinki 1926 参照。
（8）試掘の結果は考古・博物館局長アブラハム・エイタン（A. Eitan）氏の許可を得て、ここに発表する。

破壊された小さな貯水池があって、玄武岩を掘り抜いて作られており、その上に漆喰が塗られ、上は小さな２つのドームで覆われていた。この砦はサラディンによって十字軍が敗北した有名なカルネイ・ヒッティンの戦い以降に築かれたものであろう。

下ガリラヤ東部における集落モデルとテル・レヘシュ、テル・カルネイ・ヒッティンの位置

この２つの遺跡丘がある下ガリラヤ東部はそこに展開する集落の発展に大きな影響を与える地理的要素をもつ。この地域はハロド平野からアルベル川にかけて横たわる玄武岩質の丘陵地である。この地域を覆う玄武岩には２つの様相がある。ひとつは露出している玄武岩塊で、そこでは大規模な農耕は不可能である（ただし、玄武岩質の土壌は手入れをすれば非常に肥沃である）。もうひとつは玄武岩質の土壌で、水が溜まらず、泉は少ない上、少量の水しか流出させないものもある。これに加え、この地域では降雨が不安定で、多年にわたって観測された年平均降水量は 400 ミリメートルだが、これに達しないことも多い。それゆえ、玄武岩丘陵地が実際は無人で、集落や集落の中心がイサカル、タボル、ヤブニエルなどの川沿いであることは驚くにあたらない。タボル川はこの地域の最も中心的な川である。タボル川に沿って、あるいはその支流の近くに、古代の集落が存在する。ヤブニエル平野にも集落は多いが、それらの性質は他の玄武岩丘陵とは異なっている。

踏査の結果、この地域は全時代を通じて、2、3の大きな要塞化された集落を産み出しただけであることがわかった。集落跡で検出された遺物は丘陵地帯､特にヨルダン渓谷との強い関係を示唆している。平地部には長期間続いた豊かな集落が連続しており、その最初の頂点のひとつは銅石器時代における集落の繁栄である。しかし、平地部で同時代に集落の数が増えたものの、玄武岩の丘陵地帯では同時代の痕跡は僅かにひとつか２つの遺跡に残るのみである。この現象は地理条件と照らし合わせると非常に際立っている。一見、河谷沿いにも同時代の遺跡が存在するように期待されるが、実際はこれら幾つかの遺跡も河谷よりも高い位置に存在している。これは丘陵地帯が牧草地にのみ使われたのに対し、集落の中心は平地部にあったことを示している。この点から、玄武岩丘陵地とそれを囲む平地部はそれぞれ､存続を互いに依存していたと見ることができる。

表２　テル・カルネイ・ヒッティン出土の土器（図５）

No	土器	登録番号	時代	記　述
1	鉢	4/4	LB II	火災で二次的に焼かれている。白ピンク色
2	鉢	3/2	LB I-II	同上
3	S 字状屈曲鉢	5/4	LB I	同上
4	調理鍋	3/1	LB I	同上
5	円錐壺	5/5	LB II	同上
6	調理鍋	4/5	LB II	同上
7	壷	5/2	LB I	同上
8	把手付壺 (ビルビル) 胴部片	3/10	LB II	黒色粘土、白い縞
9	把手付壺 (ビルビル) 胴部片	3/9	LB II	黒色粘土、白い縞
10	鉢	12/1	Iron II	明茶色土
11	調理鍋	12/5	Iron II	明茶色土、白い含有物
12	壷	12/2	Iron II	明茶色土
13	器台部	12/3	Iron II	明茶色土

前期青銅器時代Ⅰ期とⅡ期ではタボル川の川床、その最大の泉の近くにあるヒルベト・シャハルが際立っている。この遺跡は面積が 4.5 ヘクタールの要塞化された区域である。この区域は側面が急な傾斜によって保護された部分の上にあり、その両端には高い要塞が築かれている。要塞の内部にはほとんど何の痕跡もなく、大部分で岩盤が露出している。この区域の土器はすべて前期青銅器時代Ⅱ期のもので、ヨルダン渓谷の遺物と同じである [(9)]。この区域はヨルダン渓谷における同時代の集落システムに属すようだ。ヒルベト・シャハル以外の前期青銅器時代の遺跡は小さい。ヒルベト・アダマー、シェイフ・マザイット、ヒルベト・マオグ、ヒルベト・メノラーなどである。

前期青銅器時代Ⅰ期の土器片が収集できるものの、前三〇〇〇年紀の間、テル・カルネイ・ヒッティンにはまったく人が住んでいなかった。テル・レヘシュも同時代、特別な存在ではなかった。前期青銅器時代Ⅰ期における中心的な集落はテル・レヘシュに近いヒルベト・マオグであったようだ。同時代の痕跡は遺跡の頂上部のトレンチに顕著で、その面積はおよそ１ヘクタールに達す [(10)]。ヒルベト・マオグからの土器片は同時代初期のもので、灰色磨研

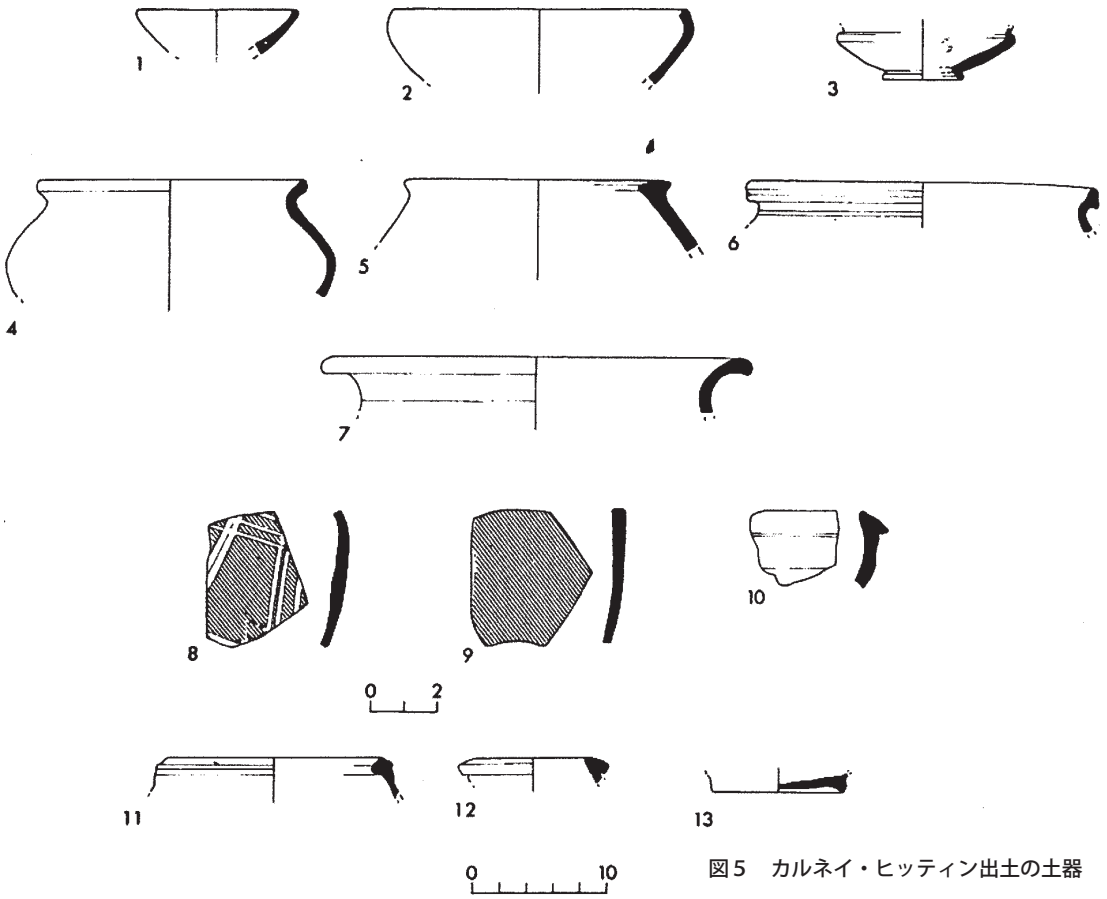


図５　カルネイ・ヒッティン出土の土器

土器や縞模様で装飾された土器片を含んでいる。これらはテル・レヘシュではほとんど見つかっていない。

このことから、テル・レヘシュにおける集落は主として前期青銅器時代Ⅱ期に始まったと考えられる。同時代からの土器はアビドゥス小壺、図柄の刻文された壺、メタリック土器と皿である。しかし同時に、同時代の中心的集落はテル・キシュヨンにあったことがわかっている。この遺跡丘はケスロト平野の縁、すなわちその平野と幾つかの泉が湧くタボル川の２つの支流の上にある丘陵地帯との境目に位置する。この遺跡の調査結果はツォリによって出版され、後期青銅器時代と鉄器時代の重要性が強調されている[11]。

しかし、この遺跡は前三〇〇〇年紀の集落システムにおいてより高い重要性をもつ。踏査の結果、ここで見つかった主要な土器片は前期青銅器時代全体に亘るものであることが確認された。さらに、居住が新石器時代からローマ・ビザンチン時代まで連続していたことは特筆に価するだろう。地形学的、また遺跡上の土器片の分散状況から見て、前三〇〇〇年紀におけるテル・キシュヨンの集落は５－７ヘクタールの広さがあった。この集落が要塞化されていたことは疑いない。1974 年に遺跡東部に掘られたトレンチでは地上から 1.5 メートルの深さで城壁が発見された。アフラとクファル・タボルを結ぶ幹線

(9) 前期青銅器時代Ⅱ期における、ゴラン高原の囲い地や他の囲い地の実態と立地は非常に興味深い点である。立地においてはすべての囲い地に共通したものがあるようで、そこから実態についての答えもおそらく得られるであろう。
(10) この遺跡ではダヤンによる試掘が行われたが、出版されていない。
(11) 注５参照。また、本巻〔『エレツ・イスラエル』15 号〕所収の K. Cohen-Arnon の論文参照。

道に近い遺跡西部に開けられた別のトレンチでは石の基礎部分のあるレンガの城壁が見つかった。この城壁は道によってできた断面でも確認できる。これらのトレンチで見つかった土器片はすべて前期青銅器時代II期のものである。

城壁がないというこの地域全体の特徴は前二〇〇〇年紀にも継続する。中期青銅器時代I期の遺物はこの地域からほとんど見つかっておらず、中期青銅器時代II期初期においては居住の連続性がまったく途切れたようである。大規模な居住が再開されたのは中期青銅器時代II期Bで、この時代にはそれまで人の住んでいなかった場所に人が住み始めたことが特筆される。前二〇〇〇年紀ではハディタ遺跡が際立っている。この遺跡は前期青銅器時代II期のヒルベト・シャハルのように、支流の上に建てられた囲い地である。峻険な斜面によってこの囲い地は防御され、北側には防衛のために堀が掘られている。ここでも囲い地内にほとんど建物を検出することができない。

この時代から同地域の集落の中心はテル・レヘシュに移動した。これ以降、テル・レヘシュは下ガリラヤ東部全域における最大にして最も中心的な集落となり、政治的意味を見出しうるのはこの遺跡丘のみとなる。この遺跡丘は周辺の城壁のない小さな集落群と比して大きさにおいて突出しており、同地域における他のいかなる遺跡丘もこの規模に達することはなかった。それらの遺跡丘とはテル・キシュヨン、テル・グヴァル（テル・ケシェト近郊）、テル・インアム、テル・アダミだが、これらの遺跡丘には巨大な建築物はなく、集落の特徴からすれば、テル・レヘシュのようなまさに要塞化された集落というよりも、城壁に囲まれていない遺跡に似ている。

後期青銅器時代にはテル・レヘシュに加えて重要な遺跡がひとつ付け加わった。それがガリラヤ湖へ下っていく「海の道」上にある城塞都市、テル・カルネイ・ヒッティンである。テル・アダミもヤブニエル平野から上方の丘陵地に至る狭い坂道を支配する上で重要であったことは疑いないが、テル・アダミは２つの巨大な集落、テル・レヘシュとテル・カルネイ・ヒッティンと同じ壇上には立つことはなかったようだ。鉄器時代の初期には、城壁のない小さな集落の数がある程度増加するが、この特徴は変わっていない。カルネイ・ヒッティンからの土器片によれば、同時代にテル・アダミには小さな集落が存在し、襟付口縁貯蔵甕の破片が発見されていることからすると、ナフタリ部族の植民居住地があったのかもしれない。

踏査の結果、テル・レヘシュはおそらく前10世紀末に放棄されたと思われる。その頃には城壁のない集落の数も激減する。それに対し、カルネイ・ヒッティンにおける発掘での出土物からは前９世紀から前８世紀に要塞化された集落があったことがわかるので、この時代に主要な遺跡がテル・レヘシュからテル・カルネイ・ヒッティンに移動したのかもしれない。

アナハラトをテル・レヘシュ、シェメシュ・アダムをテル・カルネイ・ヒッティンに同定することについて

下ガリラヤ東部における居住形態の発展に照らすと、地理的要素からこの地域を周辺地域と定義することができる。玄武岩の丘陵では独立した集落システムが発展することはなく、古代における居住の歴史は平野部での居住の発展に関係している。考古学的踏査の結果、下ガリラヤ東部の集落においても丘陵地域と平野部の間にある程度の依存関係を平野部における居住の開始過程にはっきりと見ることができる。平野部における集落現象のあるものは、しばしば完全には発展せず、玄武岩丘陵地において極端に発展し、平野部における活動をはるかにはっきりとした形で表している。例えば、平野部におけるヒルベト・ケラク土器（ベト・イェラハ土器）の登場に代表される初期青銅器時代III期の遺跡においてこのことが当てはまる。また、この時代における集落の数の減少という現象にもそれは現れている。この現象は下ガリラヤ東部においては居住の欠落という現象として現れ、平野部で起こっていた現象を反映している。平野部におけるイスラエルの定住開始

とメギド第 VI 層の特徴に関する議論に照らし合わせると、玄武岩丘陵には植民的集落が欠如していることは少なくとも前 11 世紀までは平野部にカナン人の集落が連続していたことを示している[12]。

前述のように、この周辺地域では城壁のない小規模な集落というセツルメント・パターンが発展し、遺跡丘の数は限られ、その中ではテル・レヘシュとテル・カルネイ・ヒッティンが中心的で非常に重要な遺跡丘として突出している。試みにこれら 2 つの遺跡丘を同定することによって、周辺にある城壁のない集落システムの中における遺跡丘の歴史と地位を理解する助けになるかもしれない。テル・レヘシュの特徴、すなわち、その大きさ、長期にわたって継続した居住、そしてその立地条件からは、この遺跡丘がこの地域最大の遺跡丘であり、また下ガリラヤ東部における中心的な集落であったという印象を受ける。歴史資料はテル・レヘシュ周辺に 2 つの集落に言及している。アナハラトとキシュヨンである。これら 2 つの集落はトトメス 3 世の町のリストにも言及されるが（第 52 と第 37）、アメンホテプ 2 世の遠征の描写にはアナハラトだけが言及されている[13]。聖書ではこの 2 つの地名はイサカル族の町のリストに言及されている（ヨシュア記 19 章 20 － 21 節）。トトメス 3 世のリストとイサカル族の町のリストからは、これら 2 つの集落のだいたいの位置がわかるのみである。決定的な根拠はアメンホテプ 2 世のリストで、それによると、2 回目の遠征の北の目的地がアナハラトであった（キシュヨンはこの資料には言及されていない）。アメンホテプ 2 世は 2 回目の遠征で丘陵地域の中心都市、すなわちアナハラトを目指したようである。これがこの地域の中心的な遺跡丘、すなわちテル・レヘシュをアナハラトに同定する基本的な理由である。この同定はテル・レヘシュ、つまりアナハラトが後期青銅器時代における同地域の集落システムの中で、おそらくその前の時代である中期青銅器時代、また、その後の鉄器時代初期において特権的な地位にあったことを認めるものである。

シェメシュ・アダムはトトメス 3 世のリストにアナハラトと並んで言及されている町である。この名、あるいはこの名に似た名をもつ町がイサカルの嗣業地ではなく、ナフタリ族の嗣業地に登場するため（ヨシュア記 19 章 36 節）、この町はさらに北のほうに求められるべきである。サリサロはナフタリとイサカルの境界をヤブニエル平野の南の崖の線であるとし[14]、したがってシェメシュ・アダムあるいはアダマーはこの線よりも北に探すべきであるとした。この町はアメンホテプ 2 世の 1 回目の遠征の時、叛乱の中心として描かれている。しかし、シェメシュ・アダムがトトメス 3 世のリストではこの地域のその他の集落という文脈で言及されていることから、アメンホテプ 2 世のリストにおける言及がレバノン平野の北部という地理的文脈においても解釈できることを考慮に入れる必要があろう。そうであるとすれば、ある種の困難が生じるが、だからと言ってこの同定をまったく否定するものでもない。アメンホテプ 2 世の遠征の描写がやや断片的であることから、トトメス 3 世のリストに重きを置くべきであろう。

最後に、アナハラトがアメンホテプ 2 世の 2 回目の遠征描写においてカナンの叛乱の中心として描かれており、その同定が比較的容易であるのに対し、シェメシュ・アダムは 1 回目の叛乱の中心とされていることから、もうひとつの中心的な遺跡にその場所を求められるべきである。これらの情報はすべて青銅器時代のシェメシュ・アダム、すなわち鉄器時代のアダマーを北の主要道上にあるテル・カルネイ・ヒッティンに同定する可能性を示唆している。

（12）イスラエル定住についての私見は別の論文に要約するつもりである。

（13）イェイヴィンはベエル（トトメス 3 世のリストの第 50）もそうであると指摘し、ビラと同定している。Sh. Yeivin, The Short List of the Cities which Thutmose III conquered, *Eretz-Israel* 3 (Cassuto Volume), Jerusalem 1954, 32-28 参照。この同定はビラにおける同時代の遺物の欠如と遺跡の性格、立地から見て、受け入れられない。

（14）Saarisalo, 132 参照。〔前掲注 7〕

アハロニはこのことを次のように述べた。「誇張ではなく、メギドとハツォルの間は海の道の要衝となる位置であると言うことができよう」[15]。

（15）Aharoni, *Settlement*, 83.〔前掲注４〕

צבי גל, תל רכש ותל קרני חיטין, ארץ–ישראל 15, 1981, 213–221.
Zvi Gal, Tel Rekhesh and Tel Qarney Hittin, *Eretz-Israel* 15, 1981, 213-221.

展覧会のご案内　《天理ギャラリー第 132 回展》

テル・ゼロール展 ── 東地中海沿岸の古代遺跡

日本オリエント学会は設立 10 周年記念事業として 1964 年から 1966 年までイスラエル、テル・ゼロール遺跡の発掘調査を行いました。この調査は日本隊による戦後の海外調査として輝かしい位置にあることは言うまでもありませんが、40 年が経ち、風化も否めません。今回の展覧会ではテル・ゼロールの出土遺物から約 70 点を選んで紹介するとともに、その成果を振りかえります。

期間:2007 年 10 月 1 日（月）～ 11 月 24 日（土）
場所：天理ギャラリー（東京天理教館 9 階）
開館時間 :10:00 ～ 18:00（土祝は 16:00 まで）
休館日 : 毎週日曜日／入館無料
講演会：10 月 8 日（月・祝）13:30 ～
　月本昭男・立教大学教授
　「考古学は聖書の読み方を変えられるか」
後援：日本オリエント学会、日本西アジア考古学会
交 通：ＪＲ・神田、東京メトロ・神田、淡路町、小川町、新御茶ノ水各駅（電話 03-3292-7025）
http://tokyotenrikyokan.co.jp/gallery/gallery.htm

目　次

テル・レヘシュ第 2 次調査速報　山内 紀嗣　1
テル・レヘシュとテル・カルネイ・ヒッティン　ツヴィ・ガル　3
展覧会のご案内　14
2006 年度 会計報告　14
編　集　後　記　14

2006 年度会計報告

（2006 年 4 月 1 日～ 2007 年 3 月 31 日）

1. 収　支

〔収　入〕	
会員会費	93,000
寄　付　金	1,710
研究会参加費	3,000
利　子	1
小　計	¥ 97,711
〔支　出〕	
通　信　費	13,370
消耗品費	3,150
研究会開催費	5,801
小　計	¥ 22,321

2. 決　算

収　入	97,711
支　出	22,321
昨年度からの繰越	62,977
残高（来年度に繰越）	¥ 138,367

編集後記

○ガル氏の論文で大増量となりました。レヘシュ調査の背景を共有するための一助となれば幸いです。
○学会や研究会での発表要旨や論文、書評、発掘体験記、遺跡探訪記など、アイデアをおもちの方は下記までご連絡ください。
○夏の調査にはなんとか間に合わせることができました。新たな発見を目前に控え、これまでの調査をふりかえる機会にしていただければ、というのは言い訳ですね。次は迅速にいきたいと思います。(Mi.)

イスラエル考古学研究会 ニュースレター　No. 4
2007 年 7 月 24 日
編　集：巽 善信　　宮崎 修二
発　行：イスラエル考古学研究会

〒 632-8510
奈良県天理市杣之内町 1050 番地
天理大学文学部　考古学・民俗学共同研究室内
e-mail: israelkai@yahoo.co.jp
郵便振替口座
00960-3-79256　イスラエル考古学研究会